# 勝野のみっちゃんに捧ぐ

勝野のみっちゃん。

私はこの頃ふと、さうですふと何の機會(はづみ)からかあなたのことを思ひ出して、あなたのあの時分の行爲を思ひ出しては微笑みに堪えないのです。私は今あなたが何處にどういふ生活をしてゐらっしゃるのか知らない、それよりもあなたの生死(いきしに)さへわからないのですもの。お年の程もしかとはわかりませんが、あの頃私の姉と同級であったのをみますれば、多分もう二十七八におなりなのでせう、一人二人のお母さんで確かにあるところのあなたにあの時分のことをお話するのは、なんだか皮肉のやうにも思はれますけれど、私は私の思ひ出をそのまゝに茲(ここ)に寫し取るに過ぎません。實のところ私には、あなたの眼、あなたの口、あなたの年齢(とし)から服装(みなり)から、それらを描くべくあまりに私の記憶に朧ろなのです。ですからとても想像を働かせなければ纏まった話にもなりませんけれど、しかし私は今其想像を組み立てる暇を持って居りませんから、たゞ思ひ出のまゝに次ぎから次ぎと、きれぎれに、薄いまゝに、朧ろなまゝに書いて行ってみようと思います。承知して居て下さいまし、今から十四五年前のことでございますよ。

あなたの住んでゐらしたところは、町の人が俗に縣の中と言って居たところで、何が爲めにさう言ったのかは知りませんが、郡長さんだとか校長さんだとか、すべてさういふ方達ばかりが住んで居られたところでした。

私達店家に育った小娘の眼から見れば、塀圍ひの玄關付きの、其靜まった住居(すみゐ)が尊く見えたばかりでなく、他國からはいって來てさういふところに住居(すみゐ)し、餘外見には派手な生活をするあなた方達の身の上までが、尊くも、羨しくも眺められたのでした。

何々ちゃんと呼ぶのは官員様の子と親達のいふあなた方にのみ用ゐられる尊稱でした。どんなにそれが懷しく優しく都めいて私達の耳に羨しく響いたことでせう。ごつごつして手織木綿の綿入れに着ふくれて居る私達の間に、矢絣の瓦斯ものよばっとした柄が、及ばぬことのやうに尊く見えたものでした。しかしそれに一言申し添へて置かなければならないことを今になって持つようになりました。それはよくその矢絣ものが垢(あか)じみて居たとい

ふことなんです。さうしても一つは、その時分私はやはりあなたのお父様を官員様だと思って居りましたが、あとあとになって高利貸であったといふことを聞かされました。大きくなってあなた方の行末(ゆくゑ)のお噂さなどが出る時に、さうして私が高利貸のなんであるかを知るやうになった頃。

時も折も忘れてしまひました。私は私よりも年上のあなたのお友達に蹤(つ)いて、あなたのお家に遊びに行ったことがありました。夜だったか晝だったかもはっきりいたしませんが、なんでも其時はお家の人達は一人もゐらっしゃいませんやうでした。簟笥の上には鏡臺があり、其傍の柱には時計があり……私の記憶には單にそれだけが残って居るお部屋の中で私達はなんでも大變騒ぎ廻りました。しまひには鬼事でもしたものとみえます。その時ほんとに地震が搖ったのかどうか、そのやうな氣もするし、またさうではなかったやうにも思はれますけれど、氣抜けがしたやうに靜まった子供達の間から、誰かゞ一人「あ、時計がとまった」と言ひました。みんなが柱を仰いでみました。なる程確かに今まで音のして居たカタコトの音が止んで居ます、「あ、曲って居る」と又一人が言ひました、「叱られる?」と聲をひそめた人もおりました。七つか八つばかりであった私はもうみんなの後に小さくなって胸をどきどきさせて居りました、なんだか恐ろしい結果が目の前に迫って居るやうな氣がしたのです、「どうしよう?」と又一つの小さな聲が響いた時、ちょろりと舌を出したあなたは「かまはないわ、地震が搖(ゆ)って止ったといへばいゝわ、叱られたっていゝわ」と苦もなく言ってみんなを振りかへりました。

あなたは或時澤山の友達を集めて、二十錢銀貨などをひらめかし、梨やら芋田樂やらの大振舞ひを麹屋の店先でしたことがありました、女の子達は譯もわからず不審(いぶかし)みながらもその二三日はあなたの後をつけて歩きました。ある日は町で一番の呉服屋の店に行って、縮緬や羽二重などの小切れを三寸五寸と切らせて、一圓紙幣を出してお剩錢(つり)をと言った話も、其時の番頭の口から間もなく町の人達に傳はりました。

屋根から屋根へと電線を横切って烏の群が歸って行く頃、あなたを先にした四五人の女の子は、氣合ひと竹刀の音の洩れて居る警察署の脇の小間物屋の店で、紐ものゝ根がけなどをどっさりと買ひ込みました。

その頃年々の秋祭りに買はれて來ては屋臺に乘る踊り子の一座が、町はづれの常舞臺で一週間ばかりの興行を續けて居りました。あなたを圍んだ女の子の群は、鶏頭の鮮かな色を垣に並べた畑に隣(とな)った常舞臺の汚い裏口に廻って、こそこそと何か低語(ささや)いて居りました。すると群のうちから一人がちょこちょこと抜出して、石灰のあとの白く汚く殘って居る木戸口を覗いて何か言って居りましたが、そのうちに形の剝げた浴衣を着た、十二三ばかりの鬘下地に結った細面の子が訝しさうに出てまゐりました。買って來た根がけは確かその踊り子にやったのだったと思ひます、踊り子の名はお繁とかと幽に覺えて居ます。

あなたは實際その二三日不思議な行動をしました。

お小遣ひといへば一錢二錢が普通なものと思って居る町の人達に不思議に思はれたのも無理はありません。つひに學校の先生の耳にはいって、それから親御さんに注意されたとかいふ話を聞きました。

あなたのお母さんが「なァにあの子に先達て一圓ばかりお小遣ひをやりましたから」と仰言ったかと云ふ話も親達が茶話にして居るのをちらと耳にしました。

あなたがお家内の人の留守に帳箪笥からお金を盗み出し、それが知れて怖い髭のお父さんに髷を引っ掴んで引きずり廻されたといふ話は、私がやはりいろいろな譯がわかるやうになってから知りました。

あなたは今何處に如何いふ生活をしてゐらっしゃるのでせう。必とやはり人並な、平凡な、その代り立派な家婦として相當にお子さん達にも小言を云ってゐらっしゃるのでせう。さう思ふと私はなんだか惜しくって仕様がありません。決してまたお金を盗み出せといふのではありませんけれど、あの時のやうな罪のない慾のない行爲、それが叩き直され鋳直されて常識といふ型に嵌(はめ)られて行くのが、善惡は別にして私は心外なやうな氣がします。

怜悧にならうといふことが常識的になるといふことを意味するなら、私はいつまでも馬鹿で居たい。

勝野のみっちゃん、私はあなたの名前を忘れました。滿枝であったかみちえであったか、

多分そんな風なお名前でした。その頃の女學生がして居たやうなひっつめの束髪にして、東京の學校に行ってらしったあなたのお姉さん、男と逃げたとかなんとかちらとそんなことを耳にしたことのあるあなたのお姉さんは今どうおなりなすったでせう。

それよりも勝野のみっちゃん、あなたは今何處にどうしてゐらっしゃいますか？

底本：「水野仙子全集」第五巻
初出：「讀賣新聞」明治四十四年八月六日
テキスト入力：小林　徹
公開：令和三年九月二十八日
改訂：令和五年八月一日

リンク：水野仙子「作品年譜」
水野仙子ホームページ